

# 『ソールデロ』の歴史的背景とダンテの『神曲』

吉門 牧雄

(人文学科国際コミュニケーションコース)

## Sordello's Historical Background and Dante's *Divine Comedy*

Makio YOSHIKADO

(Intercultural Course, Department of Humanities)

ロバート・ブラウニング (Robert Browning) の『ソールデロ』 (Sordello) は詩の内容よりも、その不明瞭さ (obscurity) に対する言及のほうがよく知られている珍しい作品である。<sup>1</sup> ブラウニングの伝記にはたいてい次のような逸話が紹介されている。ダグラス・ジェラルド (Douglas Jerrold) は重い病気に罹った後、そのころ出版されたばかりの『ソールデロ』を一、二頁読んでみたところ、急に顔面蒼白になり叫んだ、「ああ神様、私の頭がおかしくなっていました」と。また、アルフレッド・テニスン (Alfred Tennyson) が理解できたのは僅かに最初の行と最後の行だけであった。つまり、“Who will, may hear Sordello's story told:” と “Who would has heard Sordello's story told.” という箇所であるが、そのどちらも嘘であると述べている。さらに、カーライル夫人も『ソールデロ』を最後まで読んでみたが、ソールデロというのが人の名前なのか、町や本の名前なのかついに解らなかつたと言明している。また、トマス・カーライル (Thomas Carlyle) も『ソールデロ』と『ピパが行く』 (Pippa Passes) を読んだ感想をブラウニングに書簡 (1841年6月21日) で送り、“Unless I very greatly mistake, judging from these two works, you seem to possess a rare spiritual gift, poetical, pictorial, intellectual, by whatever name we may prefer calling it;” と持ち上げた後すぐに、“to unfold which into articulate clearness is naturally the problem of all problems for you.” と続けて、ブラウニングの詩的才能を評価しつつも、それを読者に解かりやすく伝える表現能力の欠如を率直に指摘し、次の作品は散文で書かれることを希望するとまで述べている。<sup>2</sup> このような逸話は確かに多少誇張されたものも含まれているが、『ソールデロ』が同時代の一流の知識人にさえ判読困難な代物であったことは否めないようだ。実際、この作品のためにブラウニングは極めて難解な詩人であるというレッテルが張られ、それを払拭するのに25年という歳月を要したのである。しかし、最近この作品をブラウニングの詩人としての生涯の中で重要なものとして、再評価する動きが出て来ている。だが『ソールデロ』という作品は、ソールデロが活躍した13世紀の北イタリアに関する歴史的背景やブラウニングが影響をうけた色々な出典、特にダンテの『神曲』に対する深い理解が無ければ決して十分に鑑賞できないものである。そこで、本論文ではこれらの点を考察することによって『ソールデロ』再評価への足掛かりとしたい。

### 作品の成立過程

さて次に、ウィリアム・クライド・ディヴェイン (William Clyde DeVane) の *A Browning*

*Handbook* (第二版、1955年) を参照しつつ、『ソールデロ』の成立過程を明らかにしていきたいと思う。<sup>3</sup> この詩が Edward Maxon から出版されたのは1840年5月初めのことである。出版費用は詩人の父親が支払った。ディヴェインによるとこの詩はブラウニングの詩の中で最も時間をかけたものであった。つまり1833年5月の『ポーリーン』(*Pauline*) の出版から1840年5月の出版まで7年もの歳月を要している。この詩の成立に至る過程には少なくとも四つの段階がある。第一段階は『ポーリーン』出版直後から始まり、1834年9月半ばに『パラケルスス』(*Paracelsus*) を書き始めた時までである。この時期に最初の二巻と三巻の半分とが書かれている。それで『ポーリーン』におけるほど絶大ではないが、この詩においても彼の崇敬するパーシー・ビッシュ・シェリー(Percy Bysshe Shelly) の影響から抜け出すことは出来なかった。ただし、この詩の中で、ブラウニングはシェリーの魂に向かって、“thou, spirit, come not near / Now - not this time desert thy cloudy place / To scare me, thus employed, with that pure face!” (I, 60-62) と語りシェリーからの独立をほのめかしている。また、『パラケルスス』を書くに当たっては『ソールデロ』で使おうと考えていた力と愛の結合のテーマを使ってしまった。また登場人物についても、ソールデロとエグラモアー(Eglamor) という二人の詩人の対比は『パラケルスス』の中のパラケルススとアプライル(Aprile) の関係と明らかに類似しているのみでなく、作品の強調点が外的な行為よりも主人公の魂の内的な発展にあるという点でも共通している。これではさすがに『パラケルスス』の繰り返しになってしまうということで一次棚上げになってしまった。

第二段階は1835年の春に『パラケルスス』を完成させた後の約二年間の期間である。この間、1836年の2月から4月にかけては、ジョン・フォースター(John Forster) の *Life of Strafford* 執筆の手助けに当て、その後再び、『ソールデロ』に取り組んだが、三か月後、ウィリアム・マクレディ(William Macready) のためにストラフォード(Strafford) をテーマにした劇の制作に忙殺された。だがこの時期に、ソールデロの第二の形はほぼ出来上がったと思われる。

『ストラフォード』出版(1837年5月1日)後、また『ソールデロ』に戻って来るが、今度は違ったタイプの邪魔が入った。それはバスク夫人(Mrs. W. Busk) が出版した *Plays and Poems* (1837年7月15日) の中であつた「ソールデロ」という6巻の詩である。これは正統的な伝説に則つたソールデロ像を描いた作品で、ブラウニングの作品とも共通する部分が多かつたので、彼は今まで書いてきたものを全面的に改変する必要に迫られた。そこで新しい要素、すなわちソールデロの魂は孤独の中での黙想だけでは十分に発達することができず、たとえ僅かであっても現実の社会活動に参加する必要があるという要素が加味された。

第三の段階は1837年の7月半ばからイタリアに旅立つまでの時期である。この頃、彼は『ソールデロ』にもっと歴史的要素を多く取り入れようと努力している。フォースターの *Life of Strafford* から受けた歴史に対する興味はだんだん強まっていき、また1837年に出版されたカーライルの『フランス革命』(*French Revolution*) もブラウニングの歴史趣味に大きな刺激を与えたことも想像に難くない。<sup>4</sup> また、そこで現地イタリアの地方色(local colour) に直接触れ、その地勢と歴史の知識を深めるために、ブラウニングは1838年4月13日、ヴェニスに向けて出帆した。その時、ジョン・ロバートソン(John Robertson) に宛てた手紙に、“I was not fortunate enough to find you the day before yesterday — and must tell you very hurriedly that I sail this morning for Venice — intending to finish my poem among the scenes it describes.” と彼の旅の目的を記している。ブラウニングはこの旅の前に、ベルキ(Giambatista Verci) の三巻からなる *Storia del Ecelini* を研究していたが、北イタリアでの訪問先もエケリン家に縁のある土地が圧倒的に多かつた。実際のところ、この旅行の間はほとんど詩を書けなかつたが、初めてのイタリア旅行はブラウニングと『ソールデロ』にとって非常に有意義な経験であつた。

そして、第四の段階は1838年6月にイタリアから帰国してからソールデロの完成(1839年5月26日)まで続く。この段階は実際はイタリアに居る時からすでに始まっていたとも言えるが、イタリアで撒かれた種が実を結ぶのがこの時期である。ヴェニスに居る六日間の間に、ブラウニングの心の中に一つのコンバージョンが起こった。それは、農民の娘達や町の人々の姿を静かに見ているうちに、詩の題材となるのは王侯や詩人ではなく、ただの平凡な人間なのだ気付かされた。その時ソールデロの恋人であった高貴な女性パルマの姿が遠のき、代わりに苦しむ人間性(suffering humanity)の「歪んだ魂と肉」(“warped souls and bodies,” III, 781)に対する慈悲の心に目覚めた啓示的体験であった。こうして最終的に成立した『ソールデロ』では主人公とパルマとの間のロマンチックな恋愛という要素は削られてゆき、悩める人類への愛がソールデロの中で如何に発展していったかに重点が置かれることになった。

### 作品の歴史的背景

『ソールデロ』が非常に難解である一つの理由はブラウニングが読者に余りにも大きな負担を掛け過ぎているからである。彼が長年にわたって蓄積した13世紀前半の北イタリアの歴史的状況は一般の読者にとって、いや、知識人と言われる人々にとっても馴染みの少ないものであった。ブラウニングは1863年に付けた『ソールデロ』序文の中に、“The historical decoration was purposely of no more importance than a background required; and my stress lay on the incidents in the development of a soul: little else is worth study.”と書いているが、それを文字どおりに受け取る訳にはいかない。ソールデロが活躍した時代に関する専門的な知識なしには、ソールデロの魂の軌跡は追えないからである。そこで、ここでは『イタリア史』(森田鉄郎編)<sup>5</sup>や『歴代のローマ教皇』(戸山靖一著)<sup>6</sup>等に拠りつつ、当時のイタリアの状況はどのようなものであったのか、またこの作品の中で重要な役割を担っている皇帝派と教皇派の確執と対立とがどのようにして深まっていったかを概観してみたい。

それを明らかにするためには、バルバロッサ(赤髭)と呼ばれたシュタウフェン朝のフリードリヒ一世が積極的にイタリアに介入し始めた1152年まで逆上らなければならない。彼は優れた騎士としての資質と王としての自覚をもって、イタリアで失われた皇帝の権威を回復しようと六度にわたるイタリア遠征をおこなった。1154年には第一次イタリア遠征を行い、その翌年ローマに入って神聖ローマ帝国皇帝の冠を授けられた。第二次遠征ではミラノを攻略するが、1159年のミラノの反乱で支配権を失う。しかし、再度1161年から62年にわたりミラノを再征服し、破壊し、その結果ロンバルディーアとエミリーアの全ての都市を支配下に置き、皇帝直属の役人を派遣した。さらに、フリードリヒ一世はシチリア王国攻撃を企てたが失敗し、ドイツに戻ってしまった。そのような状況の中で、ロンバルディーアの反皇帝派の諸都市はロンバルディーア同盟を成立させた。これは第一次の同盟であり、ソールデロの時代には第二次同盟が結成されている。このようにフリードリヒの帝権回復運動は全体としては成功しなかったが、シチリア王国のルジジェーロ二世の娘コスタンツァと息子のハインリヒ六世を結婚させることに成功した。一方、1190年に即位したインノケンティウス三世は教皇は全教会ばかりでなく全世界をも支配すべきだと考えた。つまり、宗教界と世俗世界を支配する政教一致の考えを推し進めていった。実際、イギリス、アラゴン、ハンガリー等の国王を自分の封臣とした。1189年、シチリア王国のグリエルモ二世が逝去すると、ハインリヒ六世は王位継承権を要求したが、そこの住人はノルマン王国に対する忠節からドイツ王を承認せず、グリエルモ二世の従弟にあたるタンクレーディを王に擁立した。それにもかかわらず、ハインリヒは1191年にはイタリアに入り、ローマで皇位を授けられた後南下し、一気にシチリアを攻略しようとし

て失敗する。しかし、再度態勢を立て直してパレルモに入り、1194年にシチリア王に即位し、教会が支配している地域へも侵入を開始した。こうしてハインリヒは教会にとって大きな脅威となっていたが、彼はメッシーナで急死してしまった。32歳であった。一方、インノケンティウスは王妃コスタンツァに圧力を加え、1198年に彼女が死去すると、当時四歳であった彼女の息子のフリードリヒの後見役になった。

この間、ドイツではウェルフェン家のオットー四世とハインリヒの弟フィリップが激しく対立していたが、1209年、教皇はオットー四世に帝冠を授けた。ところが、教皇の思惑とは裏腹にオットーはシチリア王国を帝国と結合して、教会領への侵略を開始したので、教皇はオットーを破門しフリードリヒ二世をドイツ国王とした(1212年)。フリードリヒはその後八年間にわたってオットー四世と争ったが、1220年にはイタリアに戻って、神聖ローマ帝国皇帝として冠を授けられた。ところが、彼もまたシチリア王国の支配権を強化し、それを帝国と結合させ、その上、両者の中間地帯である北イタリアを支配下に入れるという、教会側にとっては最悪の展開となった。このような状況に対抗して、新しく教皇に即位したグレゴリウス九世は、フリードリヒがインノケンティウス三世に十字軍を派遣するように約束しながら今だに実行していないのを非難し、彼を破門した。彼はこれに激しく抵抗したが、1228年には破門されたままの状態でも聖地に向けて出帆し、卓越した政治的手腕によってイェルサレムを回復することに成功し(1229年)、イェルサレム国王に戴冠された。ドイツに帰国したフリードリヒは教皇および北イタリアの諸都市との戦いを再開した。さらに、1231年にはメルフィ法典を制定して皇帝の権威の絶対化をはかり、皇帝が同時に教会の長でもあると主張した。

この当時、各都市や領主は皇帝派(ギベッリーニ党)と教皇派(ゲルフィ党)とに別れて激しく争っていた。これはもともとドイツのウェイヴァリン家とウェルフ家の争いに端を発したものであったが、それがやがてイタリアにまで飛び火してしまった。北イタリアの教皇派の諸都市は同盟を組んで皇帝に対抗した。これはブラウニングの『ソールデロ』にも出てくる第二次ロンバルディア同盟である。これはヴェローナを含む15の都市が1226年に再結成したものである。これに対しフリードリヒ二世は1237年これを軍事的に弾圧し、フェラーラ、パードヴァ、ローディ、ノヴァーラ、クレモーナなどを屈服させ、各地に代官を派遣したり、ポデスタ(行政長官)の選出を監督したり、直接任命したりした。この頃、ヴェローナのエッツェリーノ・ダ・ロマーノは皇帝と同盟関係を結んで、大いに勢力範囲を拡大した。このエッツェリーノが『ソールデロ』の中に出てくるエケリン二世(Ecelin II)である。次の教皇インノケンティウス四世は1245年、リヨンで宗教会議を開き、フリードリヒの皇帝の廃位を宣言した。彼はなおも抵抗して戦ったが、1250年12月、南イタリアで病死した。その後を継いだのがフリードリヒの庶子マンフレディであり、彼も教皇勢力と激しく対立した。そして、教皇クレメンテ四世の命でイタリアに下ったフランス王ルイ九世の弟シャルル・ダンジューはベネヴェントの戦い(1266年)でマンフレディを破り、シチリア王に即位した。因に歴史上のソールデロはこの戦いに参加し捕虜となっている。これに対しフリードリヒ二世の孫にあたるコンラディンがイタリアに向かったが、タリアコッツォの戦いで敗れ処刑されてしまった。こうしてホーエンシュタウフェン家のイタリア支配は最終的な終焉を迎えたのである。

## ダンテの『神曲』の影響

ブラウニングの『ソールデロ』にはダンテの『神曲』煉獄篇第五、六、七歌の影響が色濃く見られる。そこには非業の死をとげたが、死の直前で悔い改めたので地獄行きを免れた人々が登場してくる。例えば、ヤーコポ・デル・カッセロはボローニャのポデスタであったが、教皇派のエステ家

のアットォー八世(フェラーラ侯)と不仲になり、1298年ミラーノのポデスタとして招かれた際、エステ家の領内をさけて赴任しようとしたが、ブレンタ河畔のオリアーゴでアットォー八世の刺客に殺されたと告白している。そのような人々のなかのひとりが語った言葉はブラウニングに大きな影響を及ぼしている。彼はそれが「詩の中の人物とその目的及び運命を記述するのに新しい意味を与えてくれた」とこの詩が出版されてから数年後に、エリザベス・バレット(Elizabeth Barrett)に書き送り、その箇所を次のように英訳し、

And sinners were we to the extreme hour:  
Then light from heaven fell, making us aware,  
So that, repenting us and pardoned, out  
Of life we passed to God, at peace with Him  
Who fills the heart with yearning Him to see.

「これこそ私の Sordello の物語である」と書いている。<sup>7</sup>

これらの人々は地上の人の祈りで煉獄にいる期間が短くなるので、そのことを言付けてほしいとダンテに依頼する。ダンテはそれに対して疑問を抱くが、その答えは煉獄の山の上でベアトリーチェがしてくれるだろうとウェルギリウスが語ると、ダンテは急に力に満ち先を急ぐ。そんな折り、彼らはソールドロに出会う。その箇所を平川訳で引用してみよう。導者ウェルギリウスがこうダンテに一人の人を指し示す。

だが向こうを見ろ、一人魂がいる、一人たったひとりで  
私たちの方をじっと見ている、  
あれが私たちに捷徑を教えてくれるだろう。」<sup>8</sup>

ここから伺えるソールドロの姿は孤独で、超然とした姿である。ブラウニングのソールドロも最初はゴイトーの大自然のなかで超然として自然の君主として存在している。

そこへ私たちは向かった。おおロンバルディーアの人よ、  
君は昂然と他を見下し、  
厳かに悠然と眼を動かしていた。  
黙然としてもものもいわず  
私たちを通した。ただじっと見つめたが  
地に息らう獅子の眼に似ていた。  
それでもウェルギリウスは近づいて、  
どの登りが一番良いか教えを乞うた。  
彼はその願いに答えず、  
私たちの国と身の上を問うた。  
先生が答えた、「マントヴァ……」  
すると思いを内に秘めていた亡者は、  
やおら先生の方に身を起こして、  
「おお君はマントヴァの人か、私はソルデルロ、  
君と同郷だ！」と互いにひしとあい擁した。<sup>9</sup>

ここでソールデロは相手が同郷のマントヴァ出身であるというだけで、篤い兄弟愛が湧いている。このことがダンテの愛国心に火を点ける。当時のイタリアは各地のコムーネと呼ばれる自治都市が反目しあい、絶えず抗争を繰り返していた。それは大まかに言って皇帝派と教皇派の対立であったが、ダンテの故郷であるフィレンツェでは主勢力の教皇派そのものがチェルキ家とドナーティ家の確執に端を発し、白党（ビアンキ）と黒党（ネリ）に分かれて争っていた。ダンテ自身は白党に属し、1300年にはフィレンツェのプリオーレ（統領：最高の行政職）に選ばれるのだが、彼が大使としてローマ法王庁に行っている間に黒党は教皇ボニファチウス八世の代理のシャルル・ド・ヴァロアを市内に迎え入れてクーデターを起こし、白党を弾圧して政権を奪った。その結果、ダンテは他の三人の者とともに有らぬ罪を着せられてフィレンツェから追放され、ついに故郷に戻ることは出来なかった。こうして自分の政治的権力を拡大しようと目論んだボニファチウス八世の陰謀が成功したのである。

その後、イタリアの各地を遍歴したが、祖国に対する愛は決して衰えることがなかった。彼が理想としたのは政教分離に基づく神聖ローマ帝国であった。教皇は世俗の権力を指向することなく、あくまでも宗教界の長として人々の魂の救済に専心し、皇帝は自分の権力欲を捨て去りキリスト教の愛の精神をもって善政をしき、イタリアの統一を成し遂げることであった。ダンテはハインリヒ七世に帝国再建の夢を託していたが、ハインリヒのイタリア遠征が失敗に終わったことでその夢は水泡に帰してしまった。以上のようなダンテの姿はブラウニングのソールデロが祖国の人民への愛に目覚め理想国家としての古代ローマ帝国の復活を願ったことと符合するものがある。

また、『ソールデロ』の中に登場するソールデロの理想の恋人パルマ（Palma）は恐るべき暴君であったエケリン三世（エツェリーノ・ダ・ロマーノ三世）の妹であり、リチャード伯爵（リッカルド・ディ・サン・ボニファッチオ）と婚約させられているが、歴史的には彼女はクニツァという名前であり、パルマというのは彼女の異母姉妹であった。このクニツァの方はリチャード伯爵と実際に結婚し、やがて夫を捨ててソールデロとトレヴィーゾに逃げた後も三人の夫と多くの情夫をもった放縦な女であった。ブラウニングのパルマとはよほど趣を異にしている。

ダンテもこのクニツァを「多情の女」として『神曲』の中に登場させているが、それは意外にも天国編・第九歌においてであった。彼女が天国に置かれている理由は、「一二六〇年エツェリーノが勢力をなくすとフィレンツェへ行き、父と兄の家の奴僕たちの自由を保証する証文を作成し遺言状をつくり財産を分け与え慈善をおこなった」からであると考えられている。<sup>10</sup> クニツァは生まれ故郷である北イタリアの惨状に触れてこう語っている。

「頽廢したイタリアの国土の一角、  
 プレンタとピアヴェの源と  
 リアルトの間に位する地方に、  
 さして高くはありませんが、丘が一つ盛り上っています。  
 そこから炬火が下にくだり、  
 甚大な被害をその地方にもたらしました。  
 その炬火も私も同じ根から生まれました。  
 私はクニツァと呼ばれ、この星の光の誘惑に破れて、  
 ここで光を放っております。<sup>11</sup>

ここで言う「丘」とはエケリンの城のあったロマーノの丘であり、そこから下って来る「炬火」として言及されているのはエケリン三世であるが、彼の母アデライデ・デリ・アルベルティ（エケリン二世の三番目の妻）は彼を身ごもった時、彼女から生まれ出た炬火が周囲の町を焼き尽くした夢

を見たという。このエケリンが実際に置かれているのは地獄編の第十二歌であり、「あの額に黒髪に見える男」としてフェラーラの暴君オピッツォ二世と共に名指しされている。このエケリン三世についてはブラウニングも伝統的な見方を踏襲したようであるが、『ソールデロ』第二巻ではエケリン三世が母アダライデから生まれたのは、エケリン二世やサリングエラを含む皇帝派がヴィチェンツァから教皇派によって追い出された事件（1194年）が起こった日であるとし、しかもヴィチェンツァの町の燃え盛る炎の中であったとしている。

he (Ecelin II) for spite  
Must fire their quarter, though that self-same night  
Among the flames young Ecelin was born  
Of Adelaide . . . . . (II, 325-28)

これは上で引用したダンテの記述を意識して書いたものではないかと思われる。これはほんの一例だがダンテの『神曲』はブラウニングの『ソールデロ』に非常に大きな影響を与えていることは明白である。

#### 注

- 1 本論ではブラウニングの詩のテキストとして、Ian Jack ed., *Browning: Poetical Works 1833-1864* (London: Oxford UP, 1970) を使用した。
- 2 Philip Kelley and Ronald Hudson ed., *The Browning's Correspondence*, Vol. 5 (Winfield: Wedgewood Press, 1987) 64.
- 3 William Clyde DeVane, *A Browning Handbook* (New York: Appleton-Century-Crofts, 1955), 71-87 参照。また Donald Thomas, *Robert Browning: A life within life* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1982) 69-81 参照。
- 4 W. Hall Griffin and Harry Christopher Minchin, *The Life of Robert Browning* (London: Methuen, 1910) 94 参照。
- 5 森田鉄郎編『イタリア史』（山川出版社、1976年）、103-37 参照。
- 6 戸口靖一『歴代のローマ教皇：古代・中世編』（新教出版社、1988年）、318-34 参照。
- 7 Griffin, 103.
- 8 ダンテ『神曲』（平川祐弘訳、河出書房新社、1992年）147.
- 9 『神曲』147.
- 10 野上素一訳『ダンテ』（筑摩書房、1983年）252.
- 11 『神曲』278-79.

平成9(1997)年9月30日受理

平成9(1997)年12月25日発行

